昭和二十七年五月十五日　発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可

慈光

（通第三十八号）

第四卷・第五號

目次

自由に就いて……社説（1）
倶会一処の信嘗……花田正夫（4）
近角きそ子夫人の霊前に蹲きて……中野憲二（8）
読経餘瀝……三瓶徳英（10）
法友への返信……榊原徳草（12）

自由に就いて

社　　説

我々は自由を求めてやまない。青空高く舞ひ上つて、声を限りに鳴く雲雀、大空に翼を存分にひろげて、悠々と飛揚する鳶、自由を求める人の心はいやが上にも高揚せられる。幸に日本は七年間の占領下の生活から、主権と独立を認められて講和の光を見出した。この記念すべき日、自由ということに就いて考究したいと思ふ。

扨て我々が願ひ、救めてやまぬ自由とはどういふことであらうか。暫くここに外面的自由と内面的自由の二つに分けて考へよう。

先づ外面的自由とは縦横に我等の住む世界をひろげて得る自由である。占領から独立を得る。病氣から健康を恢復する。貧者が充分の財産を得る。科学の進歩によつて交通通信の便を得る。等々数へ上げられぬことであるが、すでに人間が有限であるから、そこに自づと縦・横の二つの限度がある。

一つには我々は何時までも健康で長寿を得たいのであるが、そこに老・病・死に障へられて、五十年か百年の生命しか得られないこれが縦の限界である。

二つには我々が地球上に国家・社会・家庭を造つて共存生活を営む以上は、其の間に定められた正しい規約を越えるならば刀と血のしぶきが起り、国家、社会は破れ、家庭は修羅場と化し、自らもそこに亡びなければならぬ。又人間の能力に限りがある以上、その限度に応じた自由の限界がある。そこに自づと横の限界がある。

ゲーテは「人生は残水の小魚の如し」と譬へてゐる。五十年百年の生命をもつて、右往左往と泳ぎ廻つて、居を競ひ食を争うてゐるが、右にも左にも、上にも下にも直ぐ衝き当つて了ふ。

第二に内面的自由とは、自分の持つ欲求に自分自身が縛られてゐる。それから解放される自由を言ふのである。小人閑居して不善を爲すといふ様に、我々凡夫小人に切角自由な閑居の時間が與へられても、熾烈な煩悩に負けて返つて我儘と放逸に流れて二度と返らぬ貴重な時間が空費されて了ふ。財物にしても同様で、多くの人の汗と油の集積である大切なものであるが、唯自己独りの煩悩の満足のみに温水の様に消費するのであれば薬も毒と転ずる。

顧れば人類三千年の歴史において、内面的自由を得るために無数の人々はその嶮路を歩み続けてゐる。孔子の「己に克ちて礼に帰る」と言ひ、キリストの「曠野の試み」と言ひ、佛陀の「降魔成道」と言ひ、皆その道を一つにするところである。

内面的自由の道がひらけずして、徒らに外面的自由を叫び、それのみに狂奔したのでは、切角與へられた自由も悪魔の手にゆだねることになる。そこにどうしても内面的自由の道がひらかれねば人生そのものが悲惨といふ外はなくなる。

成る程、病魔に犯され病床に長く苦吟する身には、如何に健康を求め、恢復を願ふ心が熾烈であるかは病む者にして始めて知ることである。働くに仕事なく妻子が食に餓える時、如何に貧苦の惨めなかが知れ、血眼になつて米塩の資を求めずには居られない。それは全くその通りであるが、一度健康を恢復すればそれで萬事が解決するであらうか。又どうにか職を見つけ米塩の資が得られたらそれで満足であらうか。所詮その道は「幾山河越えさり行かば淋しさの果てなんくにぞ今日も旅行く」の牧水の示す道であるそこにどうしても内面的自由の道を求めずには人生に光は無いことになる。

内面的自由の道

私は未だ儒教の道を知らない、又キリスト教者の自由も知らない。唯私の述べ得るのは佛陀の道である。その道は一切の煩悩から解脱への道である。

煩悩無尽誓願断とは一切の佛教徒の願である。然しその道は誠に嶮しい。煩悩の賊は四方八方から攻め寄せて来る。時に悪鬼夜行のすきまじさを呈し、時に善人美女の装をこらして現れる。右を塞げば左に走り、上を押へると下に廻り、意馬心猿と荒れ狂ふ。「煩悩深くして涯底なし、生死の海はてしなし」とはその道に志した方々の悲痛な歎きである。稀に悟つた様な氣持になれても、現実の問題に衝き当ると碎けて了ふ。急いで心を静め萬策をめぐらしてすこしの安ぎを得ても何かの縁に又も崩れ去つて行く。

父君の殺害せられた時の遺言を守つて、十五の時から四十三の年まで、一筋にその道を辿られた法然聖人も遂に「経典を披覧するに、我智ひるがへつて冥し、行法を修習するに、我機すべて及び難し」の悲歎に沈まれたのである。始めから不可能と手を拱いて眺めたのではない、実行し続けられた挙句に、愈々及び難きを知られそこに崩折れられたのである、その刹那、選択本願念佛の玄意に徹到せられたのである。

又「良寛に辞世あるかと人間はば南無阿彌陀佛と申したと云へ」と一首を残して去つた良寛和尚の詩に

四十年前[illegible]の日
辛苦虎を描いて猫に似ず。
今や嶮崖に手を撒つて看れば
只これ旧時栄藏子。

とある。処々方々に名師を尋ね修行を続けた良寛師が、真実は如何に、何処に、と血みどろの辛苦を重ねたが、道の微

光だに得られず、萬策遂に尽きはてて、千仞の断崖に落下した、その刹那、間髪を容れず、佛陀の悲願が身に徹した。徹するところ何のことはない昔のままの山本栄藏で、如意、如意である。如意とは衆生の心の如く、又如意とは佛の意の如しである。即ち衆生のありのまんまの心を「しつらはず、かざらず」そのまんまに、佛の意の自在力を以て攝めとられる消息でめる。そこに無碍のひかりを浴びて山本栄藏、即ち良寛師の呱々の声がめつた。

扨て両師の身を以て訓へられたことは、「煩悩を断ぜずして涅槃を得る」の道でめる。両師は煩悩を断ずる道を辿りに辿られた挙句、遂に涯底のない煩悩の海に沈没して了はれたのである。そこに佛陀の広大な悲願を感得せられたのである。ここに不断煩悩の上に無得の光照を蒙られて涅槃のやすらぎを得られたのである。

方向が全く一転してゐる。衆生の如来化の道が絶えて、如来の衆生化し給ふ道に於て救済の光が射したのである。惟ふに如来の如来たる所以は全き衆生化に存する。親の親たる所以は子供になりきる所に存する。親が子供になりきつて下さる所に子供はすくすくと育つて行く。如来が無限に衆生化して下さるところに衆生の無限に救はれて行く道がひらける。「余が如き下機の行法は、阿彌陀佛法藏因位の昔かねて定めおかるるをや」と落涙千行萬行せられた法然聖人、「病む時は病むがよろしく候、死ぬ時は死ぬがよろしく候」と告げられる良寛和尚の信境、いづれも衆生化しきつて下さる大慈大悲の佛願に全托された姿である。

外に残水の小魚の限界があり、内に無数の煩悩に纏縛せられる我等の唯一の救済の道は、如来衆生化の無碍の大悲を蒙つて、不自由を縁として、その不自由によつて障へられぬ光を仰ぐことである。

爾れば、大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮びぬれば、至徳の風靜に、衆禍の波転ず。即ち無明の闇を破し、速に無量光明土に到りて、大般涅槃を証し、普賢之徳にしたがふなり、知るべし。

この白道こそ親鸞聖人の歩まれた無碍の一道である。牢獄に等しき人生にあつて、人生百年光怒々たるものがある。無碍の光耀を仰いで始めて人生の正しき限界も自づと明かになり、限界を知らされることによつて限界を超えた深く広い世界を味ふことが出来る。

更に外面的自由は其人の人格如何に相応して自然にひろげられて来る。食傷することを知らぬ小供に食の自由は許されぬ。帰る道を知らぬ小供に自由な外出が許されぬのは理の当然である。自由の正しい限界を知つて、犯さず犯されず、互に共存共栄の道を進む国家・社会にこそ、世界は喜んで自由と解放の扉を開くであらう。即ち内面的自由の獲得はやがて外面的自由の解放と転ずる。

講和の日は訪づれた。これまで来るのに七年の長い歳月は

過ぎた、苦難に耐え、難澁を忍んで平和を念じた賜である、然し世界は日本の歩みを注意深く観察してゐる。この時、日本人一人一人が内面的自由、無碍のひかりを体得し、来るべき日、世界の各国が喜んでその門戸を開放してくれる日を念じてやまない。

昭和廿七年、四月廿八日
講和記念の日、草稿す。

倶會一處の信嘗

花田正夫

四十九年の私の歩みの間に、祖父祖母、父母、兄姉妹が次から次へと木の葉が散る様に死んで逝つた。最近また知友の訃報に接することも頻々として続く。かくて愈々わが身の孤独といふことを身にしんで感ぜしめられる。斯うした私の身に、阿彌陀経の「倶に一処に会す」の金言が何とも言へぬ頼もしさと有難さを覺える。

倶会一処といふことはもとより淨土往生者の得る徳であるが、唯未来死後のみに信証せられるのでは空なものとなる。現在信の上に生死を貫いてどう味ふかが大切なことと思ふ。今や全世界は打つて一丸となつた感がする、即ち交通と通信の発達は、人間の身体上の些少な出来事がすぐ全身体にひびく様に、地球上のあらゆる出来事が、すぐ各人の上にひびく様になつた。然しさうした地球上に住む者が一人一人ばらばらの主義主張を固執して行くならば、人類はいつ果てるともない暴力の渦中に沈む外はない。又小さく家庭問題においてもそうである。父と子が新旧を争ひ、夫と妻が、兄と弟が、互に唯利害のみで、或は妥協してゐるとするならば、深く遠い縁に結ばれた者同志であり乍ら孤独の旅をはてしなく続ける外はなく、現在がさうであるから、死後は「別離久長にして相会ふこと難し」と言ふことになる。斯る人生に「倶会一処」の光はどう射して参るのであらうかに就いて述べよう。

学生時代に読んで今なほ記憶に残る詩の断片に「愛する者の心は、何時か何処かで、我等は必ず相逢ふ日があると夢みる」といふ句がある。当時私自身が青春の嵐に在つて感傷的によく詠じた。然しそれは飽くまでも夢である。空しき願望であつた。

又その当時読んだ「死の勝利」といふ本で「二人は同じ屋根の下に住み、同じ食事をとり、同じ公園のベンチに腰掛けて、同じ草花を眺めてゐるが、所詮二人は二人なのである、

別々の世界に住んで永遠に一つになることは出来ない、人生は誠に淋しい所だ」といふ一節を覚えてゐる。これも深い印象を與へられたものの一つだ。然しこれは現実の生活に於いて、その確かさが実証せられる。人生意氣に感ずるとか、意氣投合といふ言葉もあるが、あれも一時、これも一時、泡沫の如く消え去つて了ふ。孤影悄然として待ちも待たれもせぬ人生の曠野にさまよふばかりである。

扨て斯うした人生の曠野にあつて、私に大きな光明を與へられたのが、涅槃経所説の、阿闍世王の大苦悶に落ちた日の耆婆大臣の慰安の言葉である。

「善き哉、善き哉、大臣今や慚愧の心あり。慚愧の人は必ず佛に救はれ得る人なり。無慚愧の者は人と爲さず、名けて畜生と爲す、慚愧ある者にして始めて父母兄弟師友あることを知る」

この教は痛烈に私の胸を打つ。慚愧あるが故に始めて真の父母、実の兄弟師友に相逢ふことが出来るといふことである。私が親に対して「自分は親の宝息子である」と思ひ上つてゐる時は真実の親の心を知ることは出来ぬ、さうした時父は「正夫に物を言ふ時は氣をつけねばならぬ、うつかりしたことを言ふと喰ひかかつて来る」と母に語つてゐた。悔いて帰らぬことながら誠に申訳のないことであつた。自分がよいと思ひ上つて居る時、誰の言葉も受け付けぬ、聞かうともしない、孤高の宮殿に堅く心の扉を閉ぢて傲然とかまへてゐる。佛陀の御目には檻に塞ぢこめられた猛獣と映るであらうが、自分ではそこが結構な座敷と錯覚してゐる。利己一点張りの心と不確かな独善主義で私に近づく者に吼えつき喰ひかかつてゐる。その猛獣の心が親をさへ近づけないのである。これでは人と名けられない畜生と名けられるのも無理からぬことである。自分がすでに畜生であるから、親兄弟を人と見ることは出来ない、冬は調法がり夏は物置に放置する火鉢同様な扱ひしか出来ない、自分に都合のよい時だけ親兄弟と親しみ、都合が悪いと弊履の如く捨てる。このことは私を取りまく一切の人々、ことに利害関係の深い者にかける害毒は甚しいものがある。

「自分はよい、自分は立派であると、恰も磨きあげた宝玉の様に思ひ上つてゐるが、そのまんまが真黒いたどん同様な存在である」と近角先生は教へて下さる。孤つきの病人が野中の肥壺の中で、自分では立派な風呂にひたつて氣持よくして居るが、その実、全身が汚水まみれになつてゐるのと同様である。斯ういふことを教へられ始めて、自己のあさましさが省みられて、そこに真の親兄弟師友の姿がほのかに見え始めるのである。相逢ふことが出来始めるのである。

然し佛教に見惑と修惑といふことを説かれてゐる。見惑は竹を割る様に破り易いが修惑は仲々除き難いとされてゐる。自己のあさましさに就いても、「われよし」とする事の非は懇切に説かれると一応納得出来る。然しながら実際の生活につ

いて、その慚愧の実行が出来るかと言へば一向に駄目である。何時でも「われよし」といふ行動をしてゐる。言葉や思想の表面では「われはわろし」と言つたり思つたりするが、身体全体にさうなれない、何時も支配するものは「われよし」ばかりである。

狂人は自ら狂人であるとの自覚のないところに狂人の本性がある。我等三毒の煩脳に狂ふ者の常として「われよし」の心しかない、そこに全身心の狂へる者の姿が存する。それは意識界よりもむしろ無意識界から流出する心である。「無慚無愧にて果てぞせん」との聖人の悲歎もそこにある。ここにおいては萬策つきて手も足も出ぬ行き詰りで、永劫の流転がその定めである。

斯る身の故に「如来廻向の御手」がある。大聖世尊は悲憐し給うて、「直ちに專ら名号を称せよ」と勧め給ふのである。「名号を執持せよ」との仰である。「ただ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべし」とのよき人の仰の至極である。その目標は「いづれの行も及び難き地獄は一定すみか」なる者である。

観佛三昧経に、「父王を勧めて念佛三昧を行ぜしむ。父王佛に白さく、佛地の果徳、真如実相、第一義空、何に因りて我をして之を行ぜしめざると、佛、父王に告げたまはく。諸佛の果徳無量深妙の境界、神通解脱ましまします。是れ凡夫の行ずる処の境界に非ざるが故に、父王を勧めて念佛三昧を行ぜしめたてまつるなり」と。この経文が道綽禪師の心を非常に強く打つたことは、禪師の著、安樂集に長々と引用されてゐる所から推察される。更に禪師自ら念佛門に帰入せられた根本が、曇鸞大師の碑文の「愚牛を放置すれば帰路に迷ひ危険に頻する、愚牛の身を完うする道は、木に繋がれて糟糠を與へられる外なし」との一節にあつた点からも推察出来る。

凡夫往生の道、それは「執持名号」の一道である、大聖の悲憐はそこに存する。我等凡愚、ただ大聖の悲憐に催されて、念佛の一道を歩ませて頂くところに、不可思議の名号のひかりに照されて無慚無愧の姿が浮び出て参るのである。そこに三毒の煩脳に狂ひ、五悪に沈む姿を打ち明けられた大無量寿経の悲化段がわがこととして心にひびいて参り、これをきつかけとして親兄弟師友の姿が僅かながら浮び上り、天地人生の一切がその善悪の相をさながらにして信の味にとけて来るのである。

その一例として御伝鈔に出て来る平太郎の故事を思ひ浮べる。平太郎は聖人の御勧化を蒙つて一筋に念佛申して居つた。ところが務の上で熊野神社に参らねばならなくなつたので聖人に可否をお尋ね申して居る。聖人は「徒らに外の威儀をととのへる要はない、ただ凡夫のままにて念佛申し申し参詣せよ」と教へられる。かくて平太郎は聖人の仰通りに熊野に詣つたが熊野権現の敬伏を感得したと述べられてゐる。かうした事例から本地垂迹とか和光同塵といふ事を宗教政治的に言ひふらした、所謂爲にする弊もあるが、それはそれとして、私自身を省みる時、凡夫小人の私が神詣をする時、一家

の平穏、幸福、健康等々の自己に都合のよい願を祈る、髪の毛一本でも利己の爲以外には動かせない本性としても其域を脱することは出来ぬ。然しかかる神詣は麦飯で鯛を釣らうとする神の利用者である。正しい神参りの姿は神々への御礼参りでなければならぬ。「のどかさや願なき身の神詣」と云ふ句もある。願なき身の神詣は唯感謝あるのみであり、斯るお参りを神は喜ばれるのである。即ちそこに神々の真姿を拜するのである。然し念佛なくして斯る参り方は我々には不可能である。たまたま御礼参りと称しても、それは自分に都合のよいことを数へ上げての御礼であるから、その反対の場合は神も佛もあるものかと云ふ恨みに落ちる。思ふ様になつたことを喜ぶ心は思ふ様にならぬ時の恨みと転ずる。唯念佛慈光下に無碍の光明を蒙るところに、かすかながら御礼心を知らされる。それは限りなき天地の恵みを蒙り乍らそれをそれと喜べない身を懺悔し、斯るあさましき忘恩の徒をも常に護り続けて下さることの忝けなさを謝するのである。つまり念佛申し申し参る、そこに真の神の心の一端に触れるのである。相会ふことが出来るのである。天地の神々が念佛の行者を百重千重囲繞して、よろこび護り給ふなりとの心に触れるのである。

以上は平太郎同行の例であるが、私自身、念佛の光に照されて聖書を読み、論語をひもとき、更に西哲の書に接する時、その中に金銀の光を放たれるよき教を蒙る。そこに夫々の教に感謝せしめられる。然しそれかと申して柳が松になり松が柳になるのではないが、神・佛・耶・儒等が夫々の持前は明らかに区別せられながら、そのままに蘭菊きそう妙香を感ずるのである。

嗚呼、俱会一処の徳なる哉、執持名号の徳なる哉。佛陀はこの故に「我是利を見るが故に斯言を説く」と勧信せられる。理を考へるとか、利を想ふといふのでなく、利益を見給うての確かな勧めである。故に東西南北上下六方の諸佛は声を合せて証誠護念し、称讃悦可し給ふのである。

嗚呼、不可思議なる哉、名号不思議の徳、相対虚仮の小善根小福徳でなく、絶対真実の広大無辺の徳海である。萬川をそのままに容れて一味に転ずる大海の如き大善大功徳である。この不可思議によつて、生存中も顔容が異る如く其の宿業を異にする孤独者、從つて死後も亦「別離長久にして相遭ふこと難き」者、生死を通じて永遠に孤立の外なき者をして、必ず現に一処に会せしめて下さる。何時か何処かで必ず会ふことが出来ると夢みる幻想ではなくして、その夢が実現せられるのである。

念佛申し申し参るところ、私は今は亡き父母兄弟をよき知識として無限の教の光をうける。それは父母兄弟が念佛申してゐたとか、信心があつたとか言ふことでなくして、私に與へられ惠まれる念佛の中に、生ける者も死せる者も、皆共に「諸の上善人」として「俱会一処」せしめて下さるのである。更に天神地祇も地上に存在するあらゆる教も、その本来

の光を感得せしめて下さるのである。

然し現実の私はまことに浮調子な生活を何時も続けて居て、父母兄弟師友、更に他の一切の全分に会ふことは出来ぬ。僅かにその片鱗に夫々触れるにすぎない。また私の生涯をかけても全分に会ふなどとは申せない、ここに浄土往生の曉においてその全分の俱会一処を期することが出来る。然も当来の利益を信じ得るのは、現在に片鱗ながら俱会一処の徳沢を蒙るがためである。栴檀は双葉から芳しいときくが、我等は少分の俱会一処の光を現在に信味せられるが故に、未来成長しきつた栴檀の芳香も確信出来るのである。

近角きそ子夫人の靈前に蹲きて

中野憲二

謹みて至心院釈尼妙曾禪尼（近角常観先生御令室）の御靈前に白し上げます。禪尼御示寂遊ばしましてすでに七週忌の歳月を経ました。安養浄刹、宝林檀上より世の極濁悪を御照覧遊すにつけ、嘸かし如何ばかりか我等を御悲憐下さることかと有難く存じます。

回顧いたしますれば今より二十九年前、大正十一年の三月中旬に、私は初めて禪尼に拜眉申し上げました、私は二高に入りました大正八年拾月先師常観先生の御教化を蒙りまして、二高三ヶ年、日夜先生の徳風を景慕致しました。その結晶が私の終生の憶び出と成る欧洲思想史論一篇であります。大学を選ぶに当り経済学を学ばんとするには当時に於ては当然河上肇博士を中心とする京都経済学部を志望す可きでありましたが、私は常観先師を慕ふ一念に東大経済学部を志願致しました。上京と共に森川町の常観先師の御宅を御尋ね申し、その時初めて禪尼に御目通り願ひました。当時廿歳の私には唯常観先生は、此の世の中で一番有難いお方、一番お慕はしい方、そして令夫人は先生にかしづき給ふ一番尊い御方と存じ上げる丈でありました。私は東大の入学許可を得て直に先生を尋ね、東大を志望しましたのは常観先生のお側において御教を頂き度い爲でありますから是非共求道学舎に入れて頂き度いと懇願申上ましたが、先生は、崩れかかつた学舎を指さして、今將に壊れんとする学舎に何も強いて入らんでも宜敷い。私の近くに住んで始終教を聞けば同じであるとの仰せでありました。そこで同じ町内のお近くの蓋平館別荘に下宿して毎日の様に先生のお側に参りました。此当時が私の一生中で一番幸福な時代であつたと懐しんで居ります。その

当時令夫人は三拾八歳位でおいで遊されたと思ひます。私が参上する毎に誠に和顔愛語を以て迎へて下さいました。又時々お志るこを御馳走して下さいました。お側には当時十一歳の勝子お嬢様がおいでであつた事を憶ひ出します。先生と大学の構内をよく散歩致しました。私の下駄が割れまして奥様から先生の御下駄を頂いたことも記憶に残つて居ります。爾来御示寂の直前、昭和二十年十月十一日附、私宛の最後の御芳書を頂きますまで、実に海山の御慈愛を賜りました事、実に数限りもありません。

私は世の女性の中に、私の知る限りに於てきそ子夫人様ほど尊くも有難い御方は無く、特に私を御慈愛下さいました事、今なほ憶ひ出しては感涙にむせぶことであります。祖師聖人に於ける惠信尼公も斯くやと拝察せられます、清く尊い久遠女性の典型をここに拝し敬慕止む能はなかつたことであります。廿有四年の御慈愛を辱う致したのであります。

我が祖国日本は常観先師の御厳訓に背き遂に秩序精神を破り、我と我が国る破滅に陥れました。誠に悲泣の至りに堪へません。然し文天祥の所謂、「山河破碎して風絮を飄はす」今日こそ佛法興隆の好機かと存じます。常観先師、妙曾禪尼が終生辛苦御経営遊しました求道会館と学舎は厳として末法濁世に残つて居ります。先師の遺鉢を継がせ給ふ、常音今師、伊惠子令夫人が、御在世の通り会館と学舎を御経営遊しまして私共末弟を御教化下さる事、昔日の通りであります。求道精神世に廃れ、皇恩灘辺皇恩を説き、零丁洋裡零丁を歎くの今日、会館と学舎が厳存してゐる事は誠に天下の奇蹟であります。

然し御長男文常国士が日支事変に於て昭和十三年九月三十日、三十一歳にて護国の英霊として永へに中支に散華遊されましたことは、御母君として如何ばかり御悲歎の御事かと恐察申し上げますが、御次男真観様は彌々御剛健に且つ雄大に、御長女勝子様は御母君そつくり生写しに、今亦御三男聽信様は学位を得られて真摯なる学者として御三方夫れ夫れ、父君母君の尊い御家庭を作られて、我が国家と国民に貢献遊しておいでになるのであります。

七週忌に当る今日、私が平常に愛誦措く能はざる蘇東披の名詩、「浮雲世事改まり、孤月此心明なり」の通り、誠に浮雲世事皆悉く改まりました。然し未法之世、濁世之群萌を悲憐し給ふ禪尼の孤月此心は明であります。謹んで御霊前に額づき、悲喜の涙止め難く香をたいて御念佛申し上げ、礼拝御礼申上ます。

和を以て貴と爲す、東邦之国二千餘載
浮雲世改まり安養に還る、至心妙光群萌を化し王ふ。

昭和二十六年十一月十三日

末弟　了軒学人釈顕爾。

※　※　※　※

讀經餘瀝

三　瓶徳英

近角常観先生の御著、信仰餘瀝の附録に、読経餘瀝と云ふことをお書き下さつてあります。先生が欧洲留学中、ベルリンに着かれて程なく、旅行の疲労と氣候の激変のため発病せられ、やつと恢癒なされた時、満目秋色の中、遙かに日本に向つて坐せられて、大無量寿経を拝読遊ばされた時、「言々句々に溢れる佛陀矜哀の大慈悲は、海外萬里の病床に乾燥せる胸中を潤ほし、歡喜胸に満ち渇仰肝に銘じ、前々拝読してゐた経文と何の相違もないのに、私の胸中には全く新たに活き活きとして今更の如く感じた云々」と仰せられてあります、

私は孤独閑暇な隠居でありますから、浄土の三部経や、教行信証などを眞宗聖典によつて毎日佛前ですこしづつ訓読させて頂いて居りますが、回顧いたしますと、私の胸中に大苦悶を生じた時、自分の餘りにも非道な罪悪深重に驚き、佛陀慈愍の餘りにも広大無辺たるにふと氣付かされ、念佛申さんと思ひ立たしめ給うた当時、大経を拝読申すと一字一句が尊く有難くうなづかされ、眞佛の御慈声と聞こえ、眞佛の法坐中にはべる心地がして、勿体ない、有難いことの限りない思ひがしたことがありました。爾来度々大経に親しんで参り訓読もいたして居ります。そして愈々佛陀広大の大悲の深く弘く身に泌みて感佩申すことであります。

扨て大経の会坐を仰ぎますと、佛陀が一代の御説法を常に遊されました王舎大城の近くの耆闍崛山の大講堂に世尊は大寂定に入られたのであります。すると三十一聖は威儀をととのへて列坐せられ、十六菩薩は神通を收めて佛陀の尊顔を瞻仰せられ、一萬二千の大比丘衆も静かに耳を傾けられるのであります。

世尊の御相好はおよろこびに満ち、きよく浄らかに澄み、御顔はひかり輝いて、五德の瑞相を現はされるのであります。

すると阿難尊者が驚き、世尊の平常と異る尊容に覚えずそのいはれを問ひ奉るのであります。佛は寂定三昧のなりで、ここに大無量寿経を説かれるのであります。即ち彌陀成佛の因果と衆生往生の因果であります。これによりまして一切善悪の凡夫を開化せられ、世間に見ることも聞くことも出来ぬ大法を述べられたのであります。そしてこの妙法に遭ひ難いことは、恰も三千年に一度花咲くといふ靈瑞華の如しと譬へられ、一切衆生がひとしく救済を蒙る絶対他力の大願は、世間の何処にも見ることの出来ぬ、能く及ぶもののない稀有最勝の大道であると説かれてあります。

近角先生の読経餘瀝中に「結局世界中の最も完全なる宗教、最も感化を與ふる書物は、却つて最も手近き所にあつ

た。私は切に諸君がこの大経を訓読して、潜める光を認め、自ら抱ける玉の価値を知られんことを勧める云云」と仰せられてあります。このお言葉が出ますには、留学中の先生の胸にこの大経が如何に強く深く輝いて感ぜられたかがうかがへ、同時にこの経が如何に大切であるかを教へられることであります。

先生が御帰国後、求道会館での御講話で幾度も幾度も繰り返してお聞かせ下さつたのも大経でありました。特に法蔵菩薩の発願修行遊されました所の「爲言をもつて、自ら害し彼を害し、彼此俱に害することを遠離して、善語をもつて、自ら利し人を利し、人と我と兼ねて利することを修習す」等の経文は今なほ私の耳の底に先生の慈声が残つて居ります。又三誓偈が終る次の節に、法蔵菩薩の超世の大願心にこたへて、天地の神々が感動し、天から妙華をあめふらし、天樂が聞えて来るのであります。斯くてあらゆる勝行と勝果を得給ふのでありますが、最後に其勝用を説かれて「常に四事（飲食・衣服・臥具・医薬）をもつて一切の諸佛を供養し恭敬す。斯くの如きの功徳称説すべからず。口氣香潔にしてウツパラ華の如し。身のもろもろの毛孔、梅檀香を出す。その香あまねく無量の世界に薫ず。容色端正にして相好殊勝なり。其の手つねに無尽の宝・衣服・飲食・珍妙の華香等の荘厳の具を出す。かくの如き等の事、もろもろの天人に超え、一切の法において自在を得たり」の経文を拝する時、私の様な大悪党が衣服・飲食・小遣銭までも過分に頂くことは、ひとへに法蔵菩薩の発願修行、本願成就の結果と、私個人の上に活きた現実の御働きを顕はして下されてある事がうかがはれ、此の経文が、如来慈父のお言葉であり、矜哀大悲の悲母の私に対する恩賜であると感ぜられるのであります。

近角先生の仰の如く「覺えず知らず全身感涙に泣き咽んだ。佛陀が我々を救済せん為に自己を忘れて実行し賜ひたる動作は、たしかに私の弱点を誡め、私の堕落を救ひ、私の罪悪を潔くし、如何なる濁世をも清淨ならしめ、如何なる偽善をも熱化すべき大眞実心の発現なる事を感知した云々」のお言葉が現に尊く有難く私の胸打つのであります。

祖師聖人が、「眞実の教を顕はさば、則ち大無量寿経これなり」と御示し下されありますことで、私共といたしましてはこの経のこころをよく頂かねばなりません。然しお経は凡夫救済の佛意でありますから、甚深微妙不可思議な教法を説かれ、我々凡夫の凡眼凡心では拝読しても解らぬのが本当かも知れません。然し信の上から度々訓読させて頂いて居りますと多少解る所も出来て参りますが、私共に解らぬ所が多くあります。譬へば私が友人に招かれて沢山の御馳走を頂きましても、私共の様な老僧で老歯の者では堅いものは食べられませんから柔いものを選びますが、私の食べられない堅い食物が一層美味なものがあります様に、経文の有難く頂ける部分をすこし味ひますと、未だ解らぬ部分はもつと有難い深い思召であらうと思はれます。

「全体、経の意は論によつて知らされ、論の意は釈によつ

て知らされるものである。そして釈の意は宿善到来の凡愚が、人師、善知識から知らせて頂いて信仰に入る」と亡父から何度となく聞かされて居りました。そして一度信眼がひらけて参りますと経意が身に深く知らされて参る様になると思ひます。

毎日忙しく活動なさる方々は閑暇と云ふものは無い事でありませうから、一日の業務を終り、家庭に帰られて、御夕食前に、家庭の和樂と子弟の教養をも考慮にいれて下さいまして、家庭の全部が佛前に集り、せめては五分間なりともお経の訓読をして頂き度いとお願ひする次第であります。

我々は財政さへ豊かになればとか、名誉さへ完うすればといふ様なことばかり考へて、財欲や名利欲に執着しきつて居りますけれども、大経に「人生では尊貴・豪富の者も憂苦萬端の苦悩に追はれ、貧窮・下賤の者は求財の苦に熱中し、またま財を得れば、その守護に苦しみ散失をおそれて憂ひ、或は非常の水難・火難又は怨敵の爲に奪ひ去られ、債主の爲に罹滅せられる」等の憂悲苦悩の相を詳らかに説かれ、かかる苦悩の有情の我等を哀愍し救済して息み給ふことなき佛陀の眞実心が溢れて居ります。斯くも広大な慈憐の御教を蒙ります時、私共は唯々佛陀の矜哀の大悲を仰ぎ、攝取不捨の慈光に照護せられて、大善大功徳の念佛と共に生かせて頂くことが、無上の大利であると信嘗せられることであります。

佛陀はここに声を励まされて「信か疑かによつて、大利を得るか、大利を失ふかの岐路に立つ。三千世界に満ちみつる大火をも超えて求めよ」とお勧め下さつてあります。

法友への返信

榊原徳草

春陽の好時節となりました。目の前の桜も二三日で咲きそめる模様です。さて久々で精しく御日常をお知らせ賜り有難く拝誦しました。お正月のお便りに業が熾んにあらはてきた云云とあつたので、その後の業報がどんなに現れたのか承りたい、どんなに苦難の毎日を送つてゐられるかしらんと思ひつゝも遂に手紙も出さず今日まできて了つたわけでした。思つたより軽い業報で先づ結構だつたといふ氣持です。

今迄は孤高を樂しむといふか、一人居の生活であり、それだけ孤独とはいつても積極的に自分の生き方を自由にもち続けることが出来たでせうが、これからはさういふ集團生活だから俗臭紛々たる底下の凡愚に文字通りなつて了ふことと思ひます。然し昔懐かしの回顧の情も根強いものだから、とつ

おいつして、泥に和し、水に合するといふことは仲々困難と覚悟きれねばなりますまい。僕などは蓑虫を最初からきめ込んで、あたふた、右往左往して、今もそれを続けてゐるので、ひとりの身の氣軽さは味つたことなしです。それも慈愛切々たる母があつたりやこそです。

貴兄の孤高、隠遁的生活も、御両親の悲惨な業報、宿業の深く恐ろしきままに、その悲惨な力ではねかへされて、高く舞ひ上つてしまつたまでのことで、決して孤高を楽しむ自分の力があつたからではないでせう。僕が貴兄と同じやうな宿業を背負つてゐたら同じやうな生活を楽しむことになつたかも知れません。今度貴兄が山を下り新しく俗界集團生活に身をおくやうになつたのは、業が転変して凡夫の姿に還へらされたのでせう。深い迷ひの吾等は、一時はどうあつても牽き込まれずには居られない根強い暗さをもつてゐます。孤高に住むも、俗臭になじむも、どつちみち同じことではいへ、吾等愚悪の本性に還らされたわけでせう。

浅原才市翁が「業の車がぐるぐる廻る、廻れば廻れ、臨終まで、それから先に車なし」と云はれましたが、深く業海転変のうちに身をおいて泣いた者の、御廻向の慈光に浴して、そこに如来を仰ぎ見て誦したこの歌は、泌々と吾身の移り易りゆく人生を視つめた者に、深い感懐を催すことと思ひます。

肉食妻帯の宗教を生活するには、その生活の内に、両手放した畢竟依の信、賜りたる金剛の信が受容されてゐなくては、どこまでいつても、いつまでたつても、徹底的に逃げきりもようせず、悲痛な泣き声で叫び廻り走り廻り、迫ひかけ念佛で一時逃れの氣安めに終始して了ふのではないでせうか。

貴兄が何時か道元禪師の「死にきる、生ききる」といふことを言つたことがありましたね。あの「死にきる、生ききる」のきるといふ極意は、自分の足をどんなにつま立ち歩きして、上手に歩けるやうになつても、その爪先からは決して得られません、「生ききる、死にきる」の極意は、超世の悲願を御成就下さつた阿彌陀佛から、直々頂戴しなければならぬものです。

A先生の御一族の御苦難は傷ましきかぎりです。弱々しいおからだで、よくも忍ばれることと驚く外ありません、まことにお念佛様のおかげですね。先生のお寺へ参つたのは一昨年の夏でした、あれから御長男が床に就かれ、奥様は既に永い間御病氣で寝て居られ何と申上げてよいやら、ほんとうに「生死の苦海ほとりなし」との聖語が身に沌みて参ります。去年の報恩講にはB先生の御教化であつたとのこと、又それについて若奥様の御疑問などについては誠に同感でありますが、然しそれこそ私などの辿つた道であります。それを払ひのけて下さるのは池山先師その外の諸善知識の御教化があつたからです。無縁の大悲がひとしほかかつてゐて下さつたからです。病む兒に遍に心重かつた如来の御慈悲がしのばれて参ります。善性人は行けませうが、吾々は他の非が見えて〳〵ならないくせに、自分のことはわかつてこない。「況んや悪人をや」とは「外に賢にして、内は愚なり」との聖語のやうに、私達にすつぽりはまつてきます。

信心を頂けば、信者と不信者とに人間を二分して上下尊卑に別けねば承知がならぬ、さういふ迷ひを知らせて下さる。

迷ひ迷ひて、迷ひのはてを知らず、我執が去れば又法執、我法二執を捨てたとしても、又捨てたことに慢心する。まことに大徳寺の開山、大燈国師は、五條橋下に乞食の群に同じて生活され、妙心寺開山、大応国師は伊深の里に農夫の群に投ぜられ、桃水和尚は乞食の群に、売茶翁は路傍に茶をひさぐ、悟を捨て、遠く離れ、覚、不覚、未覚の何れをも離れて、離れたことを忘し果てたる妙なる一心、この一心が、如来より「オネガヒダカラ、スグキテオクレヨ」の御名号、南無阿彌陀佛です。吾れ一莖草を立つ、既に七堂伽藍を建立し畢んぬ。その数たつた御六字様だが、五劫永劫の御苦労がここに告命し賜ひ、世に顕れて下さつて私に遭つて下さる、「その数わづかに六字なれば、さのみ功能のあるべしともおぼへざるに、その功徳利益の広大なること極りなし」むべなるかな、佛が佛の妙智を尽し、妙相を具現し、妙用を顕はされて、ただ吾等凡愚を救ひ度いばつかりの、光明無量、寿命無量の名号成就となつたのです。佛が私のために名号となつて下さつたのです、因位の時に名となられ、果位の時に号となられ、因願果願が六字の御名号となつて下さつたのです。

佛の本願とその成就が南無阿彌陀佛です。吾等はこの嘉号を聞信して、因位の法藏菩薩の御苦労をしのぶばかりであります。果位の阿彌陀佛に遭はれた聖人が、五劫思惟の願、因位の願をよくよく御身に味はれて、ひまなく佛の御心を謝せられたこれ、が常の仰であります。それはそのまま「常に沈み常に流転して出離の縁なき身と知れ」といふ善導大師の金言と同一であると唯円大徳は聞かせて下さる。常に沒し常に流転する、そこに常に如来の悲願が顕れて下さるのであります。

春日遲々としてゐても、もう一時間にもなります。会つて語りたいのですがそれができず、天地に恋ふものは、ただ共に凡てを語り合ひ如来に後押されて浄土への族を続ける知己あるだけです。

近詠

冬扇子

錢湯に人るもわびしや病み呆け骨あらはなる己が現し身

かくばかり瘠せ細りたる身に宿る己がいのちのはかなくもあるか

いつまでか生き永らへめこのいのち、わが業報にさしまかせゆく

不思議々々々この細りたるいのちはも彌陀のちかひに照りてかがやく

彌陀佛の誓ひのみ名のおほけなくわが身のいのち掬め取ります

南無阿彌陀この不可思議のみ名ぬちに撮め取らるるいのち尊し

編集後記

占領から講和の転機が来て日の丸の国旗が地上に浮び上つて来た。米ソ両国の間に生きて行かねばならぬ日本には種々な難問題がある。「右を立てれば左が立たぬ、左立てれば右立たぬ。両方立てれば我身が立たぬ」という窮地にあるのであるが、この窮地こそは日本全体が自覚すべき大きな機縁である。

「浮邦縁熟して調達閻世をして逆害を興ぜしめ、浮業機彰れて釈迦韋提をして安養を選ばしめたまへり」

夫王ビンバシャラの餓死を救ふに由なく、我見阿闍世の逆心をひるがへすに術なく、自ら宮殿に幽閉せられた韋提希夫人の窮地、そこに地上に光なきことを知り、佛陀矜哀の大悲に廓然大悟した。是処に韋提希は佛の眞実心一つをたのみ、己が爲すべき道を進んだのである。親鸞聖人はこの活事実を以て人類の唯一のよるべであり歸趨であると観破せられたのであつた。すでに個人の自覚が存する様に日本全体の活路もそこにひらかれねばならぬ時が来たのである。

徒らに右を叫び左に走る前に、日本の持つた宿業の重大さを痛感し、さう言ふことでは永遠に解決の道なきを知つて、我等の祖先の血みどろの中に、「是の道あり」と切り開き、高く掲げられた「無碍の一道」に歸し、その道一すぢを歩ませて頂く機縁が来たのである。

無碍の一道こそ慈々国全体において進むべき唯一の指標であると信じ、講和の日の同朋に訴へる次第である。

○

近角常観先生の「人生と信仰」が講和の日と共に再版されますことは、まことに浮邦の縁熟したるを痛感することであります。人生生活のあらゆる面から信仰の解決を指標して下された稀有の書であります。未だ書の上梓が報告されませぬが近日にあると信じ、皆様の御味読をお願ひ申し、且は一部でも多く日本の地に普及あれかしと念じてやみません。

○

▽近角きそ子夫人の追慕記は最も親炙せられた中野氏が執筆して下さいました。求道会館や学舎に御縁の深い方々が異口同音に「観音様のやうなお方であつた」と申されてゐます。先生の半身として御活動下さいました御恩を深く謝し奉ることであります。中野氏は東京都田園調布三丁目九ノ六ノ一番地に居られます。

▽「読経余瀝」は近角先生を導師と仰がれて、三瓶師の大経の信味の余瀝であります。師としては書ききれない法味を持たされてゐるのを遥察申すのでありますが、師の御勧めに随ひ大経を繰り返し訓読させて頂いて大経会坐に加へさせて頂き度いものであります。住所は島根縣大家局区内井田村であります。

▽「法友への返信」は禪家から念佛門に転入せられた榊原師の信味の表白であります。人生手放しの大悲、そこに自然法爾の信界がひらかれて参ることであります。師は京都市右京区山田開町浮住寺の住、高槻医大の事務長をしてをられます。

▽「自由に就いて」の社説は講和独立の記念として誌しました。眞の自由は無碍の道以外にあり得ないことを痛感することであります。

▽「倶会一処の信誓」は慈光誌友の今は亡き方々、愛知・竹内久三氏、岡山・堀尾こゆき女史、福井・竹下伝女史、鹿児島・藤尊影師、福岡・有田広氏の御霊前に捧げ奉る次第であります。

聚墨生

慈光第四巻第五号 昭和二十七年五月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

昭和二十七年五月十日印刷
昭和二十七年五月十五日発行
毎月一回十五日発行

定価
一部金拾七円（郵税共）
半年金百円（郵税共）
一年金二百円（郵税共）

名古屋市南区駈上町二ノ二八
編集兼発行人 花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人 本田政雄
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷所 千草印刷所

名古屋市南区駈上町二ノ二八
一道会館
発行所 慈光社
振替口座番号 名古屋一〇四七〇番